「大学テニス部が創部100周年を迎えました」

原　耕作

1．100年の歩み

創部100周年のイベントを語る前に、本学テニス部の歴史について簡単に触れることにする。

黎明期においては、日曜日の安息日の問題、戦時中解散の止む無きに至った時期、終戦後のボールを始めテニス用品の不自由な時期など、幾多の試練の時もあったが、部員たちのテニスに対する情熱は延々と変わることなく燃え続け、ここに100周年を迎えている。

周知のとおり西南学院大学の前身は旧制の西南学院高等学部（旧制）であるが、それは1916（大正5）年の学院創立から5年後（つまり旧制中学校の第1回卒業生が出た年）の1921（大正10）年に発足している。それと同時に創部された軟式庭球部は、3年後の1924（大正13）年に第1回全国高専大会を機に硬式庭球部に転向して今日に至っている。文字どおり、本学の体育会で最も古い歴史を持つクラブの一つ（柔道部、剣道部、硬式野球部に次いで4番目の古さ）であると言える。

日本のテニス界に目を移すと、総じて当初の軟式から硬式へ転じており、1925（大正14）年、九州で誕生した日本庭球協会全九州支部も当時、九大庭球部の村山長一氏（元関西庭球協会長）が奔走、西南学院をはじめ、長崎医大、旧制佐高、同山高、熊本医大、山口高商の7校が参加して発足している。

その年には、今の全九州選手権の第1回大会が開催され、一般選手を破った山口高商の中島選手が優勝している。

その後の各種大会においても試合はほとんど学生選手が上位を独占、大会の運営も全て学生が中心で行われ、これが後の九州テニス会の向上、発展に大きく貢献しており、さらに本学テニス部も輝かしい戦績をあげ『西日本に西南学院あり』と名を全国に轟かせたとの記録が残っている。

本学テニス部は、古くは戦前の西南学院高等学部時代に篠原雷次郎氏をはじめ多くのテニス愛好者が今日の基礎を築いた。戦前の記録が皆無のため、残念ながら大先輩

の活躍は詳らかではないが、戦後は1948（昭和23）年に早くも全国高専大会で3位を獲得するという輝かしい戦績を残している。

1949（昭和24）年、新制大学として西南学院大学が開設。当時は戦後の物資不足で、軟式のガットを使ったり、ボールもフェルト（表面の毛の部分）がすり切れ軽くなるので水が入ったバケツの中にボールをぎっしり詰め、上から漬物をつけるように木のフタを乗せ、さらに石を置いて翌日それを使うという繰り返しであった。

なぜボールを水に浸すかというと、ボールが水分を吸収して重くなり、ニューボールの感じがするからという理由であるが、しばらく打つとすぐ軽くなるので気休めでしかなかった。他にも、先の曲がった針金やマジックテープのような粘着力を利用して、ボールの毛を立たせて使用した。

ただ、バプテスト宣教団との繋がりがあった西南学院は、当時、アメリカから救援物資が届いており、その中にラケットが何本か入っていたこともあった。他の学校に比べれば、その点は幸せであった。

終戦直後に活躍したのは、加賀見克己氏（50期、故人）、村田隆氏（53期、故人）、岡重邦氏（58期）が特筆され、それぞれ九州テニス会の指導者的存在であり、レベルアップに寄与している。

その後も、個人戦で九州大会優勝、全日本インカレに出場した選手は枚挙にいとまがないが、団体戦となると大学日本一を決める全日本大学対抗テニス王座決定試合（以下、「王座」という。ダブルス3組、シングルス6人の計9ポイントのうち5ポイントを取る必要があるので、チームとして高いレベルが求められる）に出場したのは、岡重邦氏が中心選手として活躍した1957年に第3位、山本義秀主将（69期）が率いた1968年も第3位という結果を残した。1987年からは、錦戸洋昭氏（90期、故人）・徳永智雄氏（90期）が中心となって3年連続で王座に出場した。1987年は第3位、1988年は第4位、1989年も第4位という成績であった。

特に1987年の王座に出場した際は、当時コーチとして指導に当たられていた合瀬武久氏（西南高1960年卒）のご自宅でビールかけ、加賀見氏のポケットマネーでチーム全員でのハワイ旅行とまさにバブル期、豪快なお祝いをしていただいた。

岡、山本、錦戸、徳永の各氏は個人戦でも秀逸であったが、中でも錦戸氏と徳永氏は、西南学院高校時代にインターハイのダブルスにおいて準優勝を果たしている。錦戸氏と徳永氏はこの輝かしい戦歴を引っ提げて、1986年にそろって本学テニス部に入ってきた。それから卒業するまでの4年間、九州学生テニス界に君臨し、シングルスは錦戸氏か徳永氏のどちらかが、また、ダブルスは両氏のペアがほとんどの大会で優勝するという結果を残している。

ほとんどの大会と記したが、実際に優勝を逃した大会も筆者の記憶で2回あった。しかし、その大会も決勝で本学テニス部の矢野正文氏（90期）・西岡大氏（91期）のペアが錦戸氏・徳永氏のペアを破って優勝を果たしており、当時の本学テニス部の層の厚さを物語っている。

余談ではあるが、錦戸氏は日本代表のテニス親善大使として1988年6月に東南アジアに派遣された実績も有している。

その他の年代も数々の好成績をあげているが、近年は鹿屋体育大学が開設されたこともあり、本学テニス部は優勝から長らく遠ざかってしまった。しかし、2015年九州学生夏季テニス選手権で西上尚志氏（17期）・出水遼磨氏（19期）ペアが男子ダブルスで優勝し、2016年九州学生春季テニス選手権では橋川紗也子氏（19期）・吉田ひかり氏（19期）ペアが女子ダブルスで優勝した。このペアは翌2017年には春季、夏季も制覇している。このように女子が大会を連覇したのは、本学テニス部100年の歴史の中でも初めてであった。

以上、紙面の関係で本学テニス部の戦績を掻い摘んで紹介した。テニス部は部員の数こそ多い方とは言えないが、これまでの実績からも学院内で優秀な部の一つであるという自負の念を抱いている。

2．創部100周年記念行事

テニス部OB・OG会会則の第2条には、「本会は会員相互の交流・親睦を図り、会員とテニス部との関係を密接にし、かつテニス部の発展を助成することを目的とする」と謳われており、創部100周年を祝い、OB・OGの更なる繋がりを確認し、現役部員の技術向上と人格形成を念頭に記念行事を企画・運営した。

現役部員を交えてのテニス大会で盛り上がった（2024.10.28）

記念行事は大きく分けて、①本村剛一プロに学ぶ「実践」テニス練習会、②「JR九州テニス部」に学ぶ実践テニス練習会、③100周年記念式典の3つのイベントから成り、それぞれが意義深いものであった。

また、これら3つのイベントを企画したのは、本学テニス部が創部100周年を迎えるにあたり、OB・OGが再結束することはもちろんではあるが、ただ単に100周年を迎えて良かったとお祝いをするだけではなく、次の100年に繋げるための何かが必要だと考えたからである。つまり、現在のテニス部の課題は部員の確保であり、有望なテニス部員を継続的に確保するための取り組みを実施すべきと考えた結果である。

そのためには、本学テニス部が100年の伝統があるクラブであるということを知らしめ（知名度アップ）、また、高校生およびそのご父母に実際に本学テニスコートへ来ていただき立地の良さと環境の充実度を認識していただく事が重要だと考え、名の知れたプロのコーチおよび団体にレッスンを依頼した。

（1）本村剛一プロに学ぶ「実践」テニス練習会

本イベントは、上述のとおり九州の高校生テニスプレイヤーおよびご父母をターゲットにしており、有望な選手が本学テニス部に入部したいと思わせることを目的として2024年3月31日に本学テニスコートにて行われた。

そのため、高校生に興味を持っていただけるように、有名なプレイヤーをコーチとして招聘することがポイントであったが、コストもかかることからその費用対効果を見極める必要があった。幸い、井上武氏（88期）が10年くらい前から共通の知人を通じて接点を持ち、以後、日本リーグの応援、家族ぐるみで食事、時々テニスも教えてもらっていた本村剛一プロを紹介していただいた。本来、本村プロのレッスンであれば有料でも十分参加者を集めることができたのであるが、学内のコートで実施するとなるとお金を集めることは適切ではないので、OB・OG会で資金を賄うことになった。それでも破格の値段でお引き受けいただいたので、本村プロには本当に感謝している。

また、もう一つ実施日をいつにするかという大きな問題も抱えていた。本村プロはご多忙を極めていたので、ご都合を合わせることはもとより、高校の行事や高校生のテニス大会を把握し、出来るだけ多くの参加者を集められる日程を策定することが求められた。実際に蓋を開けてみると、把握していないスケジュールにより当日参加ができない高校があったのは大いなる反省点であった。

ここで、本村剛一プロのご経歴に簡単に触れておく。本村プロは、柳川高校卒業後の1992年プロに転向し、1993年からデビスカップ日本代表に選出されている。1994

年の広島アジア大会では団体と混合ダブルスで銅メダルを獲得。全日本テニス選手権ではシングルスで4回、ダブルスで3回優勝し、元日本ランキング1位という輝かしい経歴をお持ちのテニスプレイヤーである。

グランドスラムにも出場経験があり、デビスカップでは通算でシングルス21勝16敗、ダブルス3勝1敗を記録、2004年にデビスカップインド代表からの74年ぶりの勝利に貢献したが、2009年に現役を引退された。

なお、本学テニス部は、吉田達正氏（西南高1972年卒）が2021年度から監督として就任されており、日本スポーツ協会公認テニスマスター上級コーチ、日本スポーツ協会公認テニスマスター上級教師等の資格をお持ちであるとともに、九州テニス協会の常務理事／ジュニア委員長を務めておられるので、日頃からジュニアの育成に力を入れられている。そのため、吉田監督の勧めにより応募した高校生も多かった。ちなみに、吉田監督は、本学テニス部に“文武両道”を求め、男女ともに九州地区トップの1部リーグで優勝できるチームとなることを目標に指導されている。

本村プロのレッスンの内容であるが、当日の参加者は25人で大学生の部員およびOB・OGが練習をサポートする形で、技術的な指導と試合形式のレクチャーを組み合わせて行われた。

具体的には、25人を5人ずつ5グループに分け、それぞれ5面のコートに振り分け、午前中は基本練習を繰り返しながら本村プロからアドバイスをいただき、実際に本村プロともラリーも行った。午後からは実践を意識したゲーム形式を中心に行われた。

本村プロと1対1でラリーを行ってアドバイスを貰えるという貴重な経験を得て参加者の喜んでいる姿が印象的であった。

(2)「JR九州テニス部」に学ぶ実践テニス練習会

本イベントを行う目的については、(1) で述べた本村プロのレッスンと同じであるが、本イベントにおいては8人の選手に参加いただいたので、細かく目の行き届いたレッスンが行われた。

JR九州は、九州実業団トップクラスの実力を誇るクラブで、2021年全国実業団対抗テニス大会で準優勝するなどしており日本リーグにも出場した実績を持つ強豪である。

部員は全員がテニス推薦ではなく一般試験で入社した社員であり、一般社員と同じ勤務をしながら練習を行っている。メインの業務が交通インフラということもあり、「テニスを通じて少しでも福岡、そして九州に貢献したい」というのがクラブのコンセプトである。

なお、JR九州テニス部の監督は、本学テニス部OBの本山治樹氏（01期）であり、

地域貢献を掲げるクラブのコンセプトと相まって快く無償で練習会を引き受けていただいた。

2024年5月25日に行われた本イベントの参加者は、間口を広くしたこともあり、54人の参加者を得た。そのためどうしてもレベルに差が出てしまうので、練習開始後のラリーにより実力に応じたグループ分けを行った。JR九州テニス部の選手の皆さんには、1コートに1～2人が張り付いていただき、手厚い指導を行っていただいた。選手も明るい方ばかりであり、ユーモアを交えての楽しいレッスンに終始し、参加者も満足した様子であった。

これまで記してきた本村剛一プロおよびJR九州テニス部によるレッスンで、参加した高校生やそのご父母にどれだけ心に訴えられたのか、進学先として認知されたのか。いきなり結果は出ないかもしれないが、今後も継続して取り組んでいきたいと思った。

(3) 100周年記念式典

2024年10月28日に行われた本イベントは、朝からOB・OGを中心に現役部員を交えてのテニス大会を最初に行った。未明からかなり雨が降り実施が心配されたが、予定どおり10：00から開会式を行い、各コートでは熱戦が繰り広げられた。

また、この日は吉田紀郎氏（64期、故人）のご息女である西村のり子氏（筑紫女学園、鹿屋体育大学出身。インカレではシングルス準優勝、ダブルスベスト4。錦戸氏と同じ日新火災海上保険株式会社に入社し、日本リーグで活躍）および中野生也氏（84期）のご息女である中野佑美氏（筑陽学園出身。全日本ジュニア選手権（大阪）U14シングルス準優勝等ジュニアの頃から活躍し、現在は公益社団法人日本プロテニス協会の理事及び育成普及委員会育成・強化プロコーチ。日本ランク最高31位、世界ランク最高555位）をゲストとして招き、現役部員の指導に加え、卒業後テニスをする機会がなく久々にラケットを握るOB・OGのレッスンも受け持っていただいた。

17：00からの例年行われているOB・OG総会を経て、18：00からは記念式典が執り行われた。記念式典では、合瀬武久氏（西南高1960年卒）による記念講演に続き功労者の表彰などのセレモニーが行われた。

合瀬氏は、西南学院高等学校をご卒業後、立教大学に進まれ数々の戦績を挙げられ、デビスカップ（男子テニスの国別対抗戦）の選手候補になられたこともあり、現在は九州テニス協会会長・福岡県テニス協会会長と重責を担われている。

合瀬氏の講演は、本学テニス部100周年に相応しい100年の足跡を掘り起こす内容であった。特に興味深かかったのは、本学テニスコートの変遷であり、要約すると「最初の頃は不明だが、村田さんのお話では戦前には修猷館の北側に2面あったらしい。

戦時中につぶされ1面残っていた時期もあった。そこは、体育の授業でも使われていたそうである。1949年9月20日号の大学新聞にテニスコート新設という記事が見られる。新聞の字が潰れてよく読めないが、『西新小学校の横』のように見える。西南会館と碧波寮の間に移った時期は不明だが、現在の場所に移ったのは1980年10月と記憶している。ハードコート1面に土のコート4面（内1面は教職員用）。そして、同じ場所に2023年10月から現在のコートが供用開始された。オムニサンド5面（内1面は教職員用）でナイター設備も付けられた」というもので、新たに知り得た事も多かった。

なお、乾杯はテニス部65期のOBでもある大学同窓会会長の岩﨑文正氏がご発声を務められた。その後、会場のスクリーンに映し出されたOB・OG各位から寄せられた現役時代の写真によるスライドショーを懐かしみながら皆で旧交を温めた。